

イアン・マキューアン『土曜日』が提示する道德ヴィジョン

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 水産大学校 公開日: 2024-10-11 キーワード: morality; McEwan; novel; English literature; Saturday; literary criticism 作成者: 高本, 孝子 メールアドレス: 所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2011821

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



イアン・マキューアン『土曜日』が提示する道徳的ヴィジョン

高本孝子*

Ian McEwan's Moral Vision in *Saturday*

Takako Takamoto*

Ian McEwan's *Saturday* (2005) describes the moral problems that confront us in the 21st century : namely, (1) the biological deterministic view of life, which deprives us of the belief in providence and social justice, (2) the overabundance of information, which engenders in us the feeling of helplessness and guilt over the political, economic and physical hardships of the world.

These problems make it difficult for us to make moral choices, particularly with regard to social problems. One such case is whether the UK should have cooperated with the US in their attempt to overthrow the Hussein government.

In view of these situations, McEwan explores the moral values we should embrace in today's world, by describing the protagonist Henry Perowne's misuse of power as a brain surgeon and its totally unexpected and disastrous outcome. Here, Henry's predicament should be seen a metaphor of that of the nation.

There is an epiphanic moment at the end of the novel, when Henry, looking down at the Fitzroy Square, decides to act on fellow-feeling and to forgive his tormenter Baxter, patient of Huntington's disease, for the bodily and mental harm he had inflicted on him. Now he empirically knows that he is not an innocent bystander but an insider, whose actions are bound to have repercussions, however slight they may be, on the whole world.

This scene reminds us of the climactic scene of George Eliot's *Middlemarch*, where the heroine Dorothea likewise looks out at the labourers working in the field and realizes that she is part of the broad world, thus awakening to the religion of love for fellow human beings.

Indeed, *Saturday* has a lot in common with Eliot's novels in their moralistic concerns. Like Eliot, McEwan tries to make us see that, no matter how complicated and pessimistic the world situation has become, we all human beings are connected somehow, and should not assume ourselves as mere spectators of others' suffering.

Key words : morality, McEwan, novel, English literature, *Saturday*, literary criticism

序

Ian McEwanの最新作*Saturday* (2005) は、これまでの彼の作品とはかなり趣を異にしている。*Enduring Love* (1997) のように、冒頭から事件の渦中に読者を引き入れるわけでもなければ、*Atonement* (2001) の持つエビッ的な壮大さも見られない。主人公Henry Perowneのある土曜日の行動を追うという体裁になっているこの小説は、最初の3分の2ほどが、スカッシュの試合や買い物などヘンリーの日常の行動と、彼の心中に去来する雑感や回想の積み重ねである。そして、その後にはやっと起こる暴力事件も、*The Innocent* (1990) のように衝撃的な展開になるかと思

いきや、ご都合主義的ともいえる展開によってあっさりとは解決してしまう。「タイムズ紙文芸付録」の書評にも通読するのに苦労したとあり、¹これは読者すべてが抱いた感想であろう。もっと厳しい批評になると、いささか退屈な1人の男の一日の行動を描いただけだと、容赦がない。²だが、一見とりとめのないように見える各々のエピソードは、実はある一つのテーマへと収斂しているものであり、この作品が周到な計算に基づいて大きな構想のもとにまとめられたものであることは明らかなのである。そのテーマとは、現代社会において人間は道徳的にどのように生きるべきなのか、ということであり、マキューアンはこの問いに対する答えを、小説全体を通じて模索しているのである。

その意味では、この作品は、物語行為と小説とが持つ道徳的意義を探求した前作『贖罪』をさらに発展させた小説であると言える。³

『土曜日』においてマキューアンは、道徳的考察の視野を一段と大きく押し広げている。たとえば、現代における道徳について、生物学的決定論・情報の巨大化・個人と社会の相互作用など、現代社会に特有の状況をもとに考察を行っている。よって、本論では、この作品が提示している現代社会における道徳的ヴィジョンを明らかにしたい。

I

『土曜日』は、イラク侵攻反対の大規模なデモが行われた2003年2月15日土曜日のロンドンを舞台として、主人公ヘンリーが夜明け前に目を覚ましてから眠りにつくまでの一日の出来事を、彼を視点人物として描いたものである。

小説の幕開けは、ヘンリーがわけもなく高揚した気分で目を覚ます場面である。窓を開けた彼は、偶然にもエンジンから火を噴きながら墜落していく飛行機を目撃してしまう（実際には、もよりの空港に不時着したことが後でわかる）。この冒頭の数ページには、この作品全体が抱えるテーマがほとんどすべて導入されており、作者の入念な計算が感じられる。

冒頭で早くも提示されるこの小説のテーマの中で最もユニークなのは、一個の生物として人間を捉え、その観点から道徳的生き方を探っている点である。このことはヘンリーを脳外科医に設定したことからも明らかである。彼は何かにつけ、自分や他人の言動の動機を、その人間の体内の生物学的現象に求めようとする。たとえば、冒頭でのいわれのない高揚感について、彼は、「眠っていた間に分子のレベルで何らかの化学的偶発事がある、ドーパミン受容体を刺激し、その結果、細胞間に次々と何らかの作用が生じたのだろう⁴」と、分子生物学的観点から分析する。さらに、自宅前の広場を歩いていく看護師たちを見て、ヘンリーは、骨の内部のニューロンの働き、それによって二足歩行を行う「生物的原動機」(“biological engine”)(13)としての人間をあらためて意識するのである。

続いてヘンリーは、過去一週間に自分が手がけた脳手術を次々と回想する。そこで各々の脳手術の詳細な描写がなされるのであるが、それらの具体的な説明は、私たちの思考を成り立たせている脳が、神経節、視床、前頭葉、硬膜などさまざまな物質から成り立っている一個の器官に過ぎないという事実を読者に強く印象づける。

人間を分子の集合体である一個の生物として捉えるという観点の導入は、必然的に、人間の集合体たる社会全体について考える際にも、生物学的決定論の要素を取り入れることとなる。すべての社会が理想として掲げている民主主義を実現するためには、構成員全員が完全に平等となることが必要不可欠である。完全平等社会を目指す思想の代表格であるマルクス主義においては、貧富の差、資本家階級による労働者階級の搾取こそが問題であるとされる。そのような問題提起の前提となっているのは、富の配分を均等にすることが最重要であり、それによって万人は平等になれる、という考え方である。だが、ヘンリーは、生物学的観点から真の意味での平等は存在し得ないのではないかという疑問を呈するのである。

この小説には、生物学的に生まれつきハンディキャップを背負った者と、天分に恵まれた者とが登場する。前者は、ヘンリーとの間に車の接触事故を起こすBaxterであり、後者はヘンリーの子どもたち、DaisyとTheoである。バクスターは生まれながらにしてハンティングトン病という脳の遺伝的疾患に冒されている。現在でもすでに動作のぎこちなさ、感情の大きな振幅などの症状が現れており、いずれは廃人となることが確実である。「染色体4の中の名もない遺伝子の真ん中のCAGに40をはるかに超えてくり返しが見られる場合」にはこの病気にかかることが運命づけられるのであり、その運命は「愛も、薬も、聖書の授業も、判決も、変えることができない」非情なものである(210)。⁵

一方、天分に恵まれた方のデイジーは前途有望な詩人、シーオは才能豊かなブルース・ミュージシャンである。2人がそれぞれに才能を開花させることができたのは、2人の母方の祖父である詩人John Grammaticusの薫陶によるものが大きい。それにしても、2人にもとから才能があったことには疑いが無い。子どもがどのような資質を持って生まれてくるかは、親の教育とはほとんど関係がない、単なる偶然の産物である、と分子生物学の立場からヘンリーは言う。「どの精子がどの卵子を見つけ、二組のトランプの中からどのカードが選ばれ、どのようにシャッフルされ、二分され、再結合の際どのように組み合わせられるのか」(25)は、偶然の結果なのである。つまり、富の配分の不平等より以前に、各々の人間の間にはすでに遺伝子の配分による生物学的不平等があるというわけだ。この見解は、一般人には極論めいて聞こえるかもしれないが、現代の分子生物学においては今や常識となっている。

デイジーとシーオに限らず、ヘンリー自身も上流中産階級のエリートであり、また、ヘンリーの妻も新聞社顧問の

有能な弁護士である。要するに、ヘンリーもその家族もみな、生物学的に恵まれた人々なのである。そして、このことは、ヘンリーの家の窓から見下ろせるフィッツロイ広場に集まってくる人々との対照によって、より鮮明となっている。

フィッツロイ広場はいわば社会の縮図を呈しており、さまざまな人がやってくる（広場はこの小説において重要なモチーフとなっているが、それについては後述する）。その中には、麻薬を覚えさせられて麻薬中毒になりかかっている、デージーと同じ年頃の少女もいる。ヘンリーは、広場に集まる会社員たちとホームレスの人たちを見ながら、社会の第一線で活躍する者たちと、社会から取り残された落伍者たちとの大きな隔たりは、単に「階級や機会の有無の問題ではあり得ない」と思う。生物学的観点から見れば、「その違いは分子のレベルで遺伝暗号として書き込まれている。生計をたてられない、飲み過ぎを我慢できない、昨日決意したことを今日実行できない、そんな人間になることは運命めいたことなのだ。すべての町の公の場所に集まってくる脆弱な人々の群れは、どんなに社会的正義を実行しても消滅させることはできない」（272）。

人の運不運は、生まれ落ちた環境どころか、人となりに至るまで、すべて偶然の産物だということが強調されていることからわかるように、この小説が拠って立つ人間観・世界観は、人間の生には何の意味もないとする実存主義思想である。ヘンリーは、道路清掃夫とすれ違いながら、自分の裕福さを神の恩寵のあかしだと無条件に信じていることができたカルヴァンの時代は何と心安らぐものであっただろうかと思う。だが、実存主義の現代においては、「生計のために道路を掃除しなければいけないというのは、単に運が悪かった、ということ」(74)なのであり、彼は、清掃夫と自分がシーソーの両端に座っていて、自分の幸福が彼の不幸の上に成り立っているような罪悪感を抱くのである。

冒頭の場面で飛行機事故を目撃した際にも、事故に遭ったのがたまたま自分ではなかったということは、神の思召しではなく単なる偶然だとヘンリーは思う。心理学的に言えば、自分が生き残るべく選ばれた存在であると考えるのは、自分の存在の非重要性を認識できないという、精神的なアンバランスを示す一例に過ぎない(18)。

善行が報いられ、悪人が成敗されるという因果応報の大原則を実行する神など存在しないのだという実存主義的人間観・世界観は、マキューアンの代表作の一つ『愛の続き』（1997）においても思想的基盤を成していた。⁶だが『土

曜日』においては、語り手兼主人公のヘンリーに、直接それに言及させる形で前面に押し出されており、しかも、この実存主義的人間観・世界観は、『土曜日』においては、生物学的決定論を取り入れることにより一層強調されていると言えよう。

II

『土曜日』の冒頭には、生物学的決定論に加えて、現代の道徳を考える際に考慮すべきもう一つの大きな要素が導入されている。それは、マスコミなどが流す情報量の巨大さにより生じる諸問題である。

窓辺で広場を見下ろしていたヘンリーは、ふと空を見上げ、エンジンから火を噴きながら墜落していく飛行機を目撃するのであるが、このシーンは2001年の同時多発テロを想起させると同時に、現代特有の解決困難な道徳的問題を提示する。それは、他人の窮状を目撃し、助けの手をさしのべたいと思っても、実際には何もできないというジレンマである。そのジレンマをヘンリーは「無力であるがゆえに罪がある。罪はあるが無力である」（“Culpable in his helplessness. Helplessly culpable”）と表現する⁷。「自分の犯している罪とは、安全な寝室の中につっ立ったまま、ウールのガウンを着込んで、動くことも音を立てることもせず、半ば夢見心地で人々が死んでゆくのをしていることなのだ」（22）。この時の罪悪感はその日一日ヘンリーの脳裏に残り、無意識のうちに彼を苛むのである(181)。

このような漠然とした罪悪感とは、現代人が共通して抱えているものであろう。マスメディアが発達した今日、私たちは社会のできごとを、それこそ地球の裏側で起きていることまで、リアルタイムで知ることができる。そして、他人が苦しんでいる状況を知ると、漠然とした責任感・罪悪感を抱く。しかし一方で、そういったこと一つ一つに我がことのように反応しては、私たちは生きていけなくなってしまう。ある意味で感覚を鈍化・麻痺させなければ生きていけないという気にさせられるのだ。そこに、前世紀の人々は経験せずすんだ、現代社会に生きる我々へのみ課せられる道徳的ジレンマが生じるのである。

そのジレンマを回避する一つの方法は、ジレンマの存在自体を認めないことであろう。たとえばシーオは、国際政治や地球温暖化や世界的貧困など大きなことを考えると、悲観的な気持ちにしかならないから、自分の身の回りに起こった嬉しいことだけを考える、つまり、「小さく考える」（“think small”）をモットーとしている、と言う(35)。

またヘンリーも、店頭魚を見て、魚も痛みを感じるということが最近の研究で明らかにされたことを思い出す、「慈悲心において選択的でなければならない」(“selective in your mercies”) (127)と思う。この言葉なども、ジレンマを回避するための一つの典型的な態度を表すものであろう。

情報量の巨大化にはもう一つ問題がある。それは、それぞれの個人に入ってくる情報の恣意性の問題である。今日、無数の社会的問題が存在し、私たちはその一つ一つについて判断や対処を迫られるわけであるが、それらの問題一つ一つについてこれまた無数の情報が付随している。そして、マスメディアなどを通じてそれら情報の氾濫に接していると、すべての情報を取り入れた上で判断することはほとんど不可能になってしまい、結局、入手できた情報をもとに、もしかしたら誤った判断を下すことになるかもしれない。たとえば、ヘンリーはイラク侵攻について、ただ反戦のみ唱える人々に反感を持つが、それは彼自身がフセインの専制政治のもと無実の罪で拷問を受けたイラク人医師Miri Talebを個人的に知っているからである。そして、彼は人の意見が形成されるにあたっていかに偶然の要素に左右されるかを思う(73)。

確かに、情報が氾濫している現代においては、個人個人が道徳的にどのように振る舞えば良いのか、という問題は大変に複雑である。イラク問題の場合、侵攻はフセインの圧制に苦しむ国民を救うことであるが、一方で、戦争により多くの戦死者を出すことでもある。ここにおいてヘンリーが最も反感を抱くのは、戦争反対のデモ行進者たちの自己満足であり、独善性である。このあたりのヘンリーの見解は、作者マキューアンの意見を代弁したものとなっている。インタビューにおいて、マキューアンは“Not in my name”というスローガンに反感を持つ、と述べているが、それは、政府のやることは間違っており、自分だけは正しいという間違った思い込みに独善性の臭いを嗅ぎ取るからであり、選挙で今の政府を選んだ時点で、すでに責任が生じているのだ、と言う。⁷

ただしここで断っておかなければならないが、ヘンリーがマキューアンの分身であるとみなすことは慎まなければならない。マキューアン本人も述べているように、確かにヘンリーはこれまでの作品の中で最も自伝的要素を含んでいる人間像である。たとえば、ヘンリーは、マキューアンと同じく、フィッツロイ広場に面した邸宅に住み、アルツハイマー病を患う母親を持ち、週末にはスカッシュを楽しみ、フィッシュ・シチューを十八番としている。⁸明らか

な違いとえば、ヘンリーが脳神経外科医であることと、文学嫌いであることくらいであろう。

だが、一方でマキューアンは、イラク戦争に対するヘンリーの傍観者的態度を批判的に描出している。国内外のさまざまな政治状況に憂慮しつつも、意識の根底においてヘンリーが傍観者的態度でいることは、イラク侵攻について論じる際に、話している相手によって彼の意見が変わることに現れている。彼は、タカ派のアメリカ人の同僚Jay Strausが、「イラクは腐れ切った国家で、テロリストの根っからの仲間であり、いずれ何らかの悪事を働くにちがいないのだから、アメリカ軍がやる気になっている間に、取り除いてしまうに越したことはない」と言い切ることに反感を覚え、「ジェイと話すたびに反戦側に立つことになる」(100)。だが一方で、武力の行使に断固反対し、反戦デモに参加する娘に対しては、趣味のことについての議論と同じつもりになって、わざと侵攻賛成の立場に立って議論をふっかけてみたりするのである。次節で検討するように、マキューアンはこのようなヘンリーに対し、己の傍観者的態度を考え直させる契機として、バクスターに関連する一連の事件に遭遇させる。

III

前2節において、冒頭の夜明けの場面には、現代社会に特有の道徳的諸問題が提示されていることを検証した。この場面につき、プロットはクロノロジカルにヘンリーの一日の行動を辿る。それら個々のエピソードの中には、一見小説の持つ道徳的テーマと無関係に見えるものもあるが、実際には、それら一つ一つに道徳的テーマが込められているのである。そして、それらのエピソードの中でも特にバクスターに関連する一連の事件は、ヘンリーの考え方に修正を迫るものとして提示されている。

墜落事故を目撃した後、ヘンリーは同僚ジェイとスカッシュの試合をするため車で自宅を出るが、途中オックスフォード・ストリートで接触事故を起こしてしまい、その相手のチンピラ3人からリンチされそうになる。身の危険を感じたヘンリーは、リーダー格の男バクスターがハンティングトン病の患者であることを見抜き、脳外科医としての専門知識と権威をちらつかせて彼を動揺させ、その隙に乗じてその場を逃れる。だが、一種の正当防衛とはいえず、それはある意味で「権力の濫用」(“an abuse of authority”) (268)であった。この場面は、国民の多くが反対を唱えているにもかかわらず、それを押し切った形で、首相の権限

を利用してイラク戦争参戦を強行しようとしているイギリスのブレア首相の姿に重ね合わされている。つまり、「政治的レベルと個人的レベルにおける際限のない権力の濫用」が描かれているのである。⁹

「権力の濫用」によってバクスターのリンチを逃れたヘンリーは、予定通り同僚ジェイとスカッシュの試合をする。この場面では、2人が点を競り合う様子が事細かに説明されている。マキューアン自身がスカッシュ愛好家であることから、試合の経過の描写は臨場感があり、それ自体でもおもしろく読める。だが、それだけがこの詳細な描写の目的ではない。実はこの場面も作品全体のテーマと密接な関連があるのだ。つまり、ヘンリーがいつしか勝利することのみにこだわり、勝たなければ己の存在意義すら見失うような錯覚に陥ってしまう場面 == 「人生で欲しいものはたった一つしかない。他のことは彼の心から抜け落ちてしまった」(107) == は、スカッシュの接戦で剥き出しになったヘンリーの闘争本能をうまく表現したものであるが、人間の歴史が始まって以来現代に至るまで絶えることのない国同士、民族同士などの戦争、内乱の底にある人間の性(さが)が、日常的なレベルの事柄においてアレゴリカルに表されていると言える。

また、一つのプレーをめぐるヘンリーとジェイは反則か否かで口論になり、一時はけんか別れにもなりかねない雰囲気になるのであるが、審判がいないがゆえに険悪になってしまう2人の様子 == 「審判が立ち会わず、2人を抑える権力がないこの状況において、どう收拾をつけられたいというのだろう」(115) == は、国と国とが対立しあっており、仲介者となるべき国連がその機能を果たせていない今日の国際情勢を反映していると言えよう。

このように、接触事故とスカッシュの試合の2つのエピソードは、ヘンリーという個人のあり方が、個人の集積である社会のあり方を反映するものであることを表している。マキューアンは、第二次大戦直後のベルリンを舞台とした『イノセント』においてすでに、個人の言動が社会のあり方を反映していること、逆に言えば、社会が個人の言動の集積によって動いていることをドラマ化している。たとえば、主人公Leonard Marnhamのドイツ人の恋人Maria Eckdorfに対するサディスティックな欲望の背後に、敗戦国に対して戦勝国民が抱く優越感・勝利感があったことが示唆されているのであるが、この作品にしても、『土曜日』にしても、マキューアンの作品においては、個人の言動や置かれた状況・個人間の関係はそのまま、その個人を取り巻く社会全体の動きや状況を映し出すものであることがし

ばしば取り上げられている。¹⁰

IV

ハンティングトン病患者である弱みに乗じられ、ヘンリーに逃げられてしまい、面子をつぶされたバクスターは、仲間のNigelとともにヘンリーの家に押し入る。そして、居合わせた義父ジョンの顔を殴り、デイジーに全裸になるよう強要する。ヘンリーの脳外科医としての権力の濫用が予期せぬ暴力的展開を招いてしまったわけだが、この危機的状況は意外なほどあっさりと解決する。デイジーの詩の朗唱を聞いたバクスターがその詩(Matthew Arnoldの“Dover Beach”)に深く感動し、レイプや強盗に興味をなくしたため、呆れたナイジェルが勝手に帰ってしまうからである。一人残されたバクスターは、ヘンリーとシーオに飛びかかれ、階段を転げ落ちて頭に重傷を負う。いささか非現実的ではあるが、このようなプロット展開は、この小説の道徳的テーマに関して3つのメッセージを伝えていると思われる。

一つ目は、母性・女性性を社会に顕現させることにより平和な社会を実現することができるというメッセージである。バクスターから暴力的な意志をなくさせた一つの要因は、デイジーが妊娠しているという事実だった。バクスターと仲間のナイジェルは彼女を強姦しようとして、彼女を全裸にさせた。だが、ヘンリーも知らないことだったのだが、実は彼女は、イタリア人の恋人の子どもを身ごもっていたのだ。デイジーが妊娠していることを見て取ったバクスターらは、気をそがれた形となった == 「デイジーの状態が彼らを当惑させているのだ。嫌悪感を持ったのかもしれない。希望が出てきた」(219)。バクスターたちが感じたのが、当惑・嫌悪感だったにせよ、母性が彼らの暴力性を萎えさせたことに違いはない。この場面にはマキューアンが母性・女性性に託している思いが顕著に現れている。

1985年に発表したオラトリオ *Or Shall We Die?* の序文において、マキューアンは、核兵器の開発競争、そしてその結果としての広島への爆弾投下について、「活動的かつ攻撃的で、思いやりと慈しみの心を欠いた」男性性のみが社会においてもはやされた結果だと指摘し、男性性と女性性とが「個人においても社会においてもバランスを保って共存すべき」だと主張する。¹¹そして、そんな彼にとって、母と子は「文明が守るべき最も強力で中心的なイメージ」であると言う。¹²なぜなら、「子どもを愛する気持ちから、

安全な世界をいつまでも持続させたいという激しい欲求が生まれてくる」からだ。¹⁵マキューアンのこのメッセージは *Or Shall We Die?* だけではなく、*The Child in Time* (1987) のテーマともなっているが、『土曜日』においても、デージーの妊娠がバクスターたちの暴力に対する抑止力として機能するという点において、明白に打ち出されている。

バクスターの押し込み事件に込められている2つ目のメッセージは、文学は人間に内在する善なるもの・美なるものへの憧憬をかき立てる力を持っているということである。バクスターは、暗唱された詩に深く感動する。そして、その詩をデージーの手になるものだと思いこんだ彼は、何度も“You wrote it!”(223)と叫び、この詩集だけを持って帰ると言う。¹⁶

バクスターが暴力・略奪の意志をすっかりなくしてしまったことに呆れたナイジェルが勝手に出て行ってしまうことにより、ヘンリーたちは危機を逃れることができる。マキューアンはこの展開が不自然に見えないよう、ハンティングトン病患者には気分が極端に揺れ動く傾向があり、バクスターの突然の変心も、病気の徴候を表すとの専門的見解をヘンリーに言わせているが、それにしても、詩に深く感動したのがバクスターであったという設定には、ヘンリーたちに危機を回避する契機を与えるという目的の他に、ヘンリーと対比させることも狙いであったと思われる。＝「彼がナイフを使ったことを許すことはできない。だが、どんなにデージーが教えようとしても自分（ヘンリー）が聞き取ることができなかった、そしてきっとこれからも聞き取ることができないであろうものを、バクスターは詩の中に聞き取ったのだ」(289)。バクスターの詩に対する感受性の豊かさは、ハンティングトン病のように生物学的に説明のつくものではない。よって、生物学的決定論によって人間のすべてを理解できるとするという考え方が全面的に正しいわけではないことが明らかにされるのだ。

バクスターの押し込み事件に込められた3つ目のメッセージは、この出来事がスカッシュでの小さな諍いと同様、イラク侵攻に重ね合わされていることに関わっている。この事件が起こる以前、ヘンリーのイラク侵攻についての考えは、前節で見たように、あくまで他人事の域を出るものではなかった。しかし、バクスターの事件は、ヘンリーのイラク侵攻についての考えを変化させる契機となるのである。たとえ正当防衛のためだったとは言え、自分が犯した権力の濫用行為が、思いもかけない大きな波紋を生じさせ、その結果自分と家族とを生命の危険にさらしてし

まったことに、ヘンリーは戦慄を覚える。そして、その結果、イラク侵攻がどのような結果を生じさせるのかについての深刻な不安を抱くようになるのだ。

Where's Henry's appetite for removing a tyrant now? At the end of this day, this particular evening, he's timid, vulnerable, he keeps drawing his dressing gown more tightly around him... All he feels now is fear. He's weak and ignorant, scared of the way consequences of an action leap away from your control and breed new events, new consequences, until you're led to a place you never dreamed of and would never choose = = a knife at the throat. (277)

ここでマキューアンは、イラク侵攻に賛成と反対のどちらの立場を取るべきか、ということの問題にしているのではないようだ。それよりも、遠い国のことだから、自分は何もできないから、と傍観者の態度に甘んじることをこそ問題にしているのだと考えられる。¹⁵小説の道徳的意義について尋ねられた際、マキューアンは次のように答えている。

Slowly I've come to the view that what underlies morality is the imagination itself... Our imagination permits us to understand what it is like to be someone else... Fiction is a deeply moral form in that it is the perfect medium for entering the mind of another. I think it is at the level of empathy that moral questions begin in fiction.¹⁶

このように、自己を他人と同一化する想像力こそが、人間の道徳的資質を高めるために必要なものであり、小説はその想像力を養うための重要な手段であるとマキューアンは主張しているのだが、この主張は、デージーが朗唱した「ドーヴァー・ビーチ」の作者アーノルドと同時代の作家 George Eliot の主張をただちに想起させるものである。エリオットは、友人あての手紙に小説の目的を次のように書いている。

[T]he only effect I ardently long to produce by my writings, is that those who read them should be better able to *imagine* and to *feel* the pains and the joys of those who differ from themselves in everything but the broad fact

of being struggling erring human creatures. (イタリック原文)¹⁷

上の2つの引用文が内容的にきわめて似通っていることは明白であるが、実は、エリオットとの共通点はそれだけにとどまらない。小説末尾のヘンリーの覚醒の場面も、エリオットの代表作 *Middlemarch* を想起させるのである。この場面は、『土曜日』のテーマを総括しているとも言える重要な部分であるので、エリオット作品との関わりに注目しながら、次節において詳しく検討したい。

VI

『土曜日』は、小説の幕開けからちょうど24時間後、長い一日のあとで、小説冒頭と同じくヘンリーが広場を見下ろす場面で幕を下ろすのであるが、この場面は前節でも述べたように、ヘンリーの覚醒を描く重要な場面である。¹⁸ まず第一に、この場面が、デージーが朗唱する「ドーヴァー・ビーチ」が描く情景と重なることは言うまでもないだろう。この詩においても、詩人は夜、窓辺に立っている。窓の外の世界は美しく見えるが、実際には、「信仰の海」 (“[t]he Sea of Faith”)¹⁹も今はなく、「喜びも、愛も、光も、確実さも、平和も、苦痛を取り除くものも何もない」 (“neither joy, nor love, nor light, /Nor certitude, nor peace, nor help for pain”) のである。詩人は窓辺に恋人を呼び寄せ、互いに誠実を尽くそう (“true to one another”) と呼びかけるのであるが、ここで、恋人は読者のことだと見ることできる。つまり、この詩はダーウィニズムなどによって信仰を持てなくなった時代にあって、恋人への呼びかけにことよせて、普遍的な人間愛を訴えているのである。

しかし、筆者はここで、ヘンリーが広場を見下ろすこの場面が、エリオットの *Middlemarch* の終結部のクライマックス場面にも重ね合わされていることに注意を喚起したい。ヘンリーが広場に集まるさまざまな人間たちを思い描くことによって人間愛に目覚めるこの場面は、『ミドルマーチ』の主人公 Dorothea が窓の外を眺め、一面に広がる畑で仕事に励む農夫や羊飼いを、同胞愛の実践という義務に目覚めるというエピソードの瞬間と同質のものである。この場面においてドロシアは、自分が広い世界の一部であることを実感し、「ぜいたくな避難所から、ただの傍観者として外を眺めてはいけぬ」と決意するのだ²⁰ “She was a part of that involuntary, palpitating life, and

could neither look out on it from her luxurious shelter as a mere spectator, nor hide her eyes in selfish complaining.”²⁰

ヘンリーもドロシアのように、窓から広場を見下ろす。そして、ドロシアが農夫たちを眺めて広い世界を思うのと同じように、午前3時の今は人気（ひとけ）のないこの広場にも、昼間にはさまざまな人々が集まってくることを思う。その中には、仕事を持ち、普通に社会生活を営んでいる人々もいれば、ホームレス・酔っぱらいなど、どこにも行き場のない社会の敗残者もいる。ヘンリーはそのような広場の光景を思い出し、あたかも観覧車に乗って頂上に達したときのように、すべてが見通せるような気になる。そして、バクスターが辿る精神的死、そして、母の肉体的死、次に自分と妻がいずれ辿る仕事人としての死を思う。その時、バクスターのことを我が身のことに感じるのである。このように、自分をバクスターと重ね合わせた彼は、バクスターを犯罪者にするまいと決意する。ヘンリーはその決意を「リアリズム」だと思ふ²¹ “一人の男が地獄に墮ちるのに追い打ちをかければ、自分たち自身がつまらない人間になってしまうだけなのだ” (278)。

このような考え方はエリオットの説く「人間愛の宗教」に連なるものである。実存主義はまだ生まれていない時代であったが、エリオットもまた神の不在を確信していた。そして、それゆえにこそ、人間同士が互いに助け合うべきだ、それによって社会は漸次改良されていくのだという確信を持っていた。

もちろん、エリオットのもう一つの代表作 *Romola* の主人公ロモラが献身的な介護によって疫病で苦しむ村の人々を救済した、といったような、いわば「聖女コンプレックス」²² 的な壮大なエンディングと比べれば、ヘンリーがバクスターの起訴を思いとどまるという行為そのものは、はるかにスケールが小さいと言えよう。そのスケールのちがいが、エリオットが生きていた時代とマキューアンが生きている現代の社会的状況のちがいによるものであることは明らかだ。

ヘンリーは窓辺に立ち、100年前の1903年2月に同じように窓辺に立っていた英国紳士は、自分の息子たちが第一次大戦で戦死するだろうとは夢にも思っていなかっただろうと考える。彼は社会が「理想的な社会秩序の実現に向けての途上」(277)にあり、社会の向上を信じて疑わなかったからだ。アーノルドやエリオットも基本的にはそんな希望に満ちた時代の人間だった。

だが、エリオットたちとは異なり、現代の私たちはすでに二つの世界大戦を経験し、9・11の同時テロを目の当た

りに見た。そして、今なおテロリズムや内戦が絶えることのない不安な時代に生きている。一方、これまでの考察からも明らかのように、情報が肥大化した複雑な現代社会においては、人間一人一人の力は矮小化されてしまっている。

しかしそれでも、私たちは自分が社会とつながっていることを忘れてはならない、とマキューアンは訴える。自分自身の幸福に逃げ込んではいけないのだ。この作品の末尾にあえて『ミドルマーチ』的クライマックスを持ってきたねらいは、このメッセージを伝えるためだったと考えられる。

この小説をポスト9・11の世界を描いたものとして捉えようとするDouthatは、この小説を物足りないと評している。²²しかし『土曜日』は、単にポスト9・11の社会とか、イラク侵攻の是非といったある特定の問題について描こうとしたのではなく、もっと普遍的なメッセージを伝えようとしていると見るべきであろう。ヘンリーの接触事故を巡る一連の出来事がイラク侵攻についての国のあり方のメタファーであると同様に、イラク侵攻についての議論もまた、国内国外にまたがる政治状況全般についての洞察を表したものと捉えるべきだと思われる。つまり、『土曜日』は道徳的ヴィジョンを持ちにくい現代社会の特質を明らかにした上で、人間はどのように生きるべきかという問題を正面から見据えた小説なのである。マキューアンは前作『贖罪』を「僕のジェイン・オースティン小説」²³と呼んだが、『土曜日』は彼の「ジョージ・エリオット小説」と言えるだろう。

註

- 1 Theo Tait, "Ian McEwan's longest day." Rev. of *Saturday*, by Ian McEwan. *Times Literary Supplement* 9 Feb. 2005.
- 2 Ross G. Douthat, "After Tragedy." Rev. of *Saturday*. *National Review New York* 57. 11, (2005) 48-50. Online. 8 Aug. 2005.
- 3 マキューアンは物語行為を現実認識の手段として捉えており、『贖罪』において、物語行為、そしてその最も洗練された構築物としての小説とが持つ道徳的意義について考察を行っている。(高本孝子「ラブ・ストーリーの復権に向けて」『贖罪』における「物語」と道徳』、『英文学と道徳』、園井英秀編(福岡：九州大学出版会, 2004), pp. 249-266.)
- 4 Ian McEwan, *Saturday* (London : Jonathan Cape, 2005)
- 5 以下、この版からの引用はすべてかっこ内にページ数のみを記す。
- 5 バクスターの他に、脳の障害をきたしている者として、アルツハイマー病患者となったヘンリーの母親Lilyも登場する。彼女はすでに自分の息子も認識できなくなっている。
- 6 たとえば、この作品の冒頭場面は、気球に取り残された子どもを助けようとして、最後まで気球のロープを放さなかった男が墜落死するというものである。(高本孝子, 「Enduring Love: 相対化された『物語』」, 『九州英文学研究』19 (2002): 55-68.)
- 7 McEwan, "The Salon Interview : Ian McEwan."
- 8 Peter Fray, "The Enduring Talent of Ian McEwan." Rev. of *Saturday*. *The Age* 29 Jan. 2005. Online. 18 July 2005.
- 9 "March of the Day." Rev. of *Saturday*. 4 Feb. 2005. *Hampstead and Highgate Express* 24. Online. 7 July 2005.
- 10 高本孝子, 「イアン・マキューアン『イノセント』における"innocence"の意味」, 『ブッカー・リーダー』, 吉田徹夫監修, 福岡現代英国小説談話会編. 開文社出版, 2005, 249-67.
- 11 McEwan, *Or Shall We Die?* (London : Jonathan Cape, 1983) 9.
- 12 McEwan, *Novelists in Interview*. Ed. John Haffenden (New York : Methuen, 1985) 182.
- 13 McEwan, *Or Shall We Die?* 9.
- 14 ここで、バクスターを感動させた「ドーヴァー・ビーチ」がアーノルドによって書かれたものであることは大きな意味をもつ。というのも、Peter Childsが指摘しているように、アーノルドはその著書*Culture and Anarchy*において、芸術と文学が人生において中心的な存在であることを主張しているからである。(Peter Childs, *The Fiction of Ian McEwan* (Basingstoke : Palgrave Macmillan, 2006) 146.)
- 15 Childsも、世界に蔓延している暴力と自分とが無関係だという思いこみの誤りを指摘することがこの小説の重要なテーマであると述べている(Childs, 147)。
- 16 Liliane Louvel, Gilles Menegaldo and Anne-Laure Fortin, "An interview with Ian McEwan." *Etudes Britanniques Contemporaines* 8. Online. 7 Jul. 2004.
- 17 George Eliot, *The George Eliot Letters*, ed. Gordon S.

- Haight (New Haven : Yale Univ. Press, 1977), III, 111.
- 18 広場がこの作品に頻出する重要なモチーフであることは、シーオが作曲したジャズの曲が「都会の広場」 (“City Square”) をテーマにしたものであることから明らかである。
- 19 Matthew Arnold, “Dover Beach,” *The Oxford Anthology of English Literature*, ed. Frank Kermode and John Hollander (New York : Oxford Univ. Press, 1973), II, 1379-8.
- 20 George Eliot, *Middlemarch*, ed. Bert G. Hornback (New York: W.W.Norton & Company, 1977) 544.
- 21 織田元子, 『フェミニズム批評 == 理論化をめざして』 (東京: 勁草書房, 1988) 173-208.
- 22 Douthat, 48-50.
- 23 Jeff Giles, interview with Ian McEwan, “A Novel of [Bad] Manners.” *Newsweek* [Atlantic Edition] 8 Apr. 2005. Online. 6 June 2005.